
おじさんはロマンチスト

鉄下 学

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おじさんはロマンチスト

【Nコード】

N7987B

【作者名】

鉄下 学

【あらすじ】

少女はお金に困っていた。働く口も見つからない。そこで、最期の手段を考えたのだが、これもなかなか思うようには行かない。そこに、中年のおじさんが降って来た。

美和は、また職を変えることになった。

折角、友達が紹介してくれたコンビニ店員の仕事だったが、店長と折り合いが悪く、つい

「あんたなんかがいる店でやってられねえよ！」
と捨て台詞を吐いて出てきてしまった。

先週のことである。

何日間の給料は貰う権利はあるのだが、美和は取りになど行けやしない。

そんな性格なのだ。

財布の中には3万2千円と少ししかない。

明日には、アパートの家賃4万3千円を払わなければならない。

この街では安い掘り出し物件だったが、今の美和にはきつい金額である。

アパートの入居時に、「身分のしっかりした人でないとねえ」と大家さんに言われ、

「はい、ちゃんとデパートに勤めてますから」と言ってしまった。いた。

確かにそのときはそうだった。

嘘などはない。

アルバイトだが、デパートの食堂のウェイトレスの仕事が決まっていた。

だが、それも半年と持たなかった。

人と、うまくやれないのである。

美和は、それは、自分が悪いのではなく、すべて相手が悪いものだと思っていた。

「ツイてないのだ」と思っていた。

どうしよう？

次の仕事を探してはいるのだが、これといって特技のない美和を雇ってくれるところなど、そう簡単には見つからない。

友達も、その殆どが、過去に仕事を紹介してくれたのだが、それをことごとく辞めてしまったのだから、今となっては紹介もしてはくれない。

このままだと、家賃どころか、食べるものを買うお金すらなくなってしまう。

美和は、昨日から、何度かテレクラへ電話をかけていた。

最後の手段だと思うのだ。

だが、2万円の金額を口にする、それだけで切られてしまうのだ。

「今時、何様のつもりだ」などと罵声を浴びせられることもあった。

その金額でもいい、という男も数は少ないがいるにはいた。

それで、実際に指定の場所に行ってみると、それらしき姿は見当たらない。

俗に言う「すっぱかし」である。

そうしたことばかりで、時間だけがどんどん過ぎていく。

今日こそ、何とかしなくては。。。

美和は、何も食わずにアパートを出てきた。

もう1円も使わない、そう考えて、小銭入れと携帯電話だけをポケットに入れている。

兎も角も、少なくとも家賃に不足する1万1千円を何とかして。そればかりを考えている。

食べるとすれば、それを超える額が手に入ってからだと。

また、公衆電話を探して・・・と考えながら、河川敷にある公園の傍を通る。

手には、何軒かのテレクラの番号を書きとめたメモを握っている。

昨日のやり取りを思い出している。

2万円じゃ、駄目かも。

でも、それだったら、ふたりに抱かれなければ到達しない。

1万円だったら、ふたりと出会えるだろうか？

美和には自信は無かった。

処女ではないし、セックスの経験だってちゃんとある。

だが、それは、すべて相手が勝手にやっただけで、自分から仕掛けたことなど1度も無い。

ましてや、1日に、2度の経験も無かった。

1回だけで、くたくたになる自分を知っていた。

だが、今は、そんなことを躊躇している場合ではないのだ。
極端に言えば、生きるか死ぬかの境目だと思う。

そんなことを考えながら歩いていると、その公園の中からひとりの男が飛び出してきた。

丁度、階段のあるところである。

美和がその男とぶつかった。体が吹っ飛ばされる。

「ごめんなさい！」

男は、大きな声で謝って、美和の傍に駆け寄ってくる。

「怪我はない？大丈夫？」

男は、かなり困惑している。

「ゴメンね、階段から飛べるか、試してたんだ。」

男は、そう言いながら、頭をかいた。

よく見ると、五十歳を超えたようなおっちゃんである。

美和は、その話を聞いて、つい吹き出してしまった。

五十歳を超えた中年のおっちゃんが、公園で、階段から飛べるかを試してたというのである。

なんとも滑稽な話である。

男は、美和が立ち上がると、その背中やジーンズの埃を払ってくれた。

「本当に、大丈夫？怪我は無かった？」

男は、なおも心配そうに聞いてくる。

「うん、大丈夫。じゃ、行くから・・・」

美和がそれで離れようとする、後ろから男が追ってきた。そして、美和の前に回りこんでくる。

「しつこい奴」と美和は思った。

だが、男は、財布から札のすべてを取り出して、
「ごめん、これしか持ち合わせが無くて。」

と言って、千円札を何枚か差し出した。

「お詫びの気持ちだから。受け取って。」

美和は驚いた。

ただ、ぶつかっただけである。しかも怪我をするほどでもない。
なのに……と訝しく思う。

「嘘でしょう？からかつてるの？」

美和は、口ではそう言った。

気持の上では、今にも両手が前に出そうなのだが。

「これって、お財布の中の全部でしょう？後で困らない？」
と、男の顔をじつと見る。

男は、何事か頷きながら、

「あのねえ、実はこれからハロー（職安）に行くんだ。」

「おじさん、失業中なの？」

「そうだったんだけど、ハローからある工場の仕事を紹介されて
いるんだ。」

「そう、それは良かったじゃない？」

「うん、だけどね、給料も安いし、重労働なんだ。」

「でも、仕事あるだけ、まだだね。私なんか……」

「それで、それを受けるかどうか、あの階段で試してたんだ。」

「えっ！……どうということ？」

「5段のところから飛んで、こけなかったら、この仕事やろうと思
つて。」

「それで、私とぶつかったの？」

美和は笑えて来た。

「うん、君のお陰で、僕はこけなかった。君が代りにこけちゃった
けど。」

「あははは……」

美和は本当に笑い出した。

「だから、これはそのお礼。じゃあ、そういうことで・・・」
と、男は何枚かの千円札を美和の手に握らせて、元来た方向へと戻っていく。

美和は、振り返って、軽く頭を下げた。

そして、受け取った千円札を手の中で確認する。

そこには、10枚の千円札と2枚の五千円札があった。

ふと気付くと、手に持っていた筈の、テレクラの電話番号を書いたメモがなくなっていた。

(完)

（後書き）

この短編は、あるブログに『ロマンチスト』というタイトルで書いたものを加筆・修正したものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7987b/>

おじさんはロマンチスト

2010年10月9日01時04分発行